新出三冊本『信長公記』小考

―近世小説の揺籃期―

和田恭幸

要　旨　太田牛一作『信長公記』の新出伝本を発見し、これに新出三冊本の名称を与えた。新出三冊本は、草稿段階の状態を伝える、現時点唯一の伝本であると考えられる。このことにより、いわゆる十五巻本は、作者の意図によって「首巻」を除いたものであることが判明する。そこには、〈当世〉文学を欲する読者と中世的な作者の葛藤を見ることができ、〈現実〉〈当世〉を希求する近世小説の成立する直前の状況を示す恰好の事例として注目することができる。

一、研究の目的と経緯

近世小説の特質の一つに、「〈現実〉への関心」という、見逃しがたい一点が存在する。[1] そして、この次の段階に「当世批判」をめぐる諸問題が用意される如くである。では逆に、本格的な「当世批判」を語る仮名草子が登場する以前、即ち近世小説の揺籃期において、〈当世〉への欲求は如何なる胎動を見せていたのか。個々の論考が、漸次にもあれ新たなる文学史研究に糾合していくものであるのなら、一等早く具体的な事例を以て説明しなければならなかった、譲り難い研究課題ではなかったのか。些かの誇張に赤面しつつも、如上、本稿の出発点はそこにある。

さて、近世初期において、当代における古典文学の諸作品は、どのような位相に存在していたのか。件の問題に立ち入るための、必要不可欠な問いかけであろう。試みに、慶長から寛永に至る間の出版物の全体を眺望してみると、所謂「国文学書」は、その数の少なさにおいて際だっている。ことに、慶長・元和を経過して、商業出版の黎明期といわれる寛永期の整版本には、それが誠に顕著であって、実のところ古活字刊本よりも一層冷酷な事実を提示するのである。これを極端に評するならば、特権的な貴紳の秘庫にしか伝えられ得ない、特別な中にも格別なる高みに存在していた、ということになる。

そこで、もう一サイズ太い管見の管を用意して、今日の国文学研究の範疇で「作品」と称する分野へと拡大して見ると如何様か。すると、軍記物語こと軍書の数々が視野に入ってくる筈である。いわずもがな、軍書の出版件数は他を圧倒する程に多いのである。たとえば、古活字刊本の「保元・平治物語」は、川瀬一馬氏の『増補古活字版之研究』の時点において、すでに十一種の版が確認されている。さらに、追加をなすならば、冨春堂刊本が最も適切な事例となろう。冨春堂古活字刊本の初見は、慶長七年刊『脈語』である。二巻全四十丁という薄っぺらな医書の出版は、冨

春堂こと五十川了庵が医者であったことに徴すれば何らの不自然さも残らない。これに対し、翌年の慶長八年には『太平記』四十巻四十冊を、慶長十年には伏見版の内の一つ『新刊吾妻鑑』五十一冊を刊行。ことに、『新刊吾妻鑑』には、同じく慶長十年の跋文を付す類似品（無界古活字刊本）が存在する。ささやかな医書から移った先は大部の軍書であり、なおかつそれが幕府の目にとまり伏見版の刊行に参与。そして巷間ではその類似品が作られた。誠に解り易い直線図式である。

そして、妙に豪華な寛永整版本の軍書。それらは、ありし日、漸次安定に向かう武士の家々に、自分たちの階層の書物として、床間飾りにもあれ読書の対象にもあれ、望まれて流布していったことは間違いない。と、すれば、軍書にこそ近世初期の、それまで書物に縁のなかった新たなる階層の、文学を含めた文化的「何か」を解き明かす鍵が埋まっている可能性が有りはしないか。さらに、近世初期には、古典的な軍書に加えて、『信長公記』（太田牛一著）・『信長記』（小瀬甫庵著）、そして『太閤記』（小瀬甫庵著）等が登場してくる。そこで私は、太田牛一作『信長公記』の新出の一伝本を研究することによって、〈当世〉への欲求のあり方の具体を探り当てたいと思ったのである。

二、新出三冊本『信長公記』について

本稿において紹介を試みる『信長公記』の一本は、現存の諸本（十五巻本系・十六巻本系）の本文が完成する以前の、草稿段階の本文を伝える貴重な一本である。正確には、草稿本の転写本である。以下、当該原本の書誌をはじめ、本文の状態等を縷々述べていきたい。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

新出三冊本『信長公記』
第2冊　本文1丁オ

信長公記　　太田牛一作　寛永頃写・大本三冊　　東京都某家所蔵

装訂　原装、五針袋綴装。冊数、全三冊。紙数、上巻（目録三丁・本文四八丁）・中巻（目録三丁・本文四二丁）・下巻（目録三丁・本文五二丁・後方遊紙一丁）。料紙、楮紙（稍厚い張りのある上製）。寸法二七・四×二〇・〇センチ。表紙、伽羅色（丁子色の退色）。

外題　「信長記　上（中）（下）」。題簽（無辺・原題簽）、左肩。本文と同筆。

目録　各冊の巻頭に付す。本文と同筆。目録題なし。

内題　なし。

本文　漢字片カナ表記。毎半葉一一行。字高二二・七センチ。書写相は、極めて早い筆致にて精写には非ず。よって誤写あり。朱校入り。各条とも一つ書き。冊の分かちのみで、一五巻・一六巻本系の如く「巻」には分けられていない。

奥書　なし。

備考　作者名の署名なし。上巻は一六巻本系の「首巻」に相当。中巻巻頭は一五巻本系・一六巻本系の巻二に相当（巻一相当本文は欠落）。ほか、巻六・一三～一五欠。巻七相当部分から年代配列が狂う。

所謂「信長記」には、太田牛一作と小瀬甫庵作との、二つが存在する。両者の混同を避けるため、牛一本を『信長公記』とし、甫庵本を『信長記』とする使い分けが、斯界の常識となっている。そのため、右の書誌解題においても、原本記載書名の他に、調査者認定書名として『信長公記』を立てた。以下、本稿においては、当該原本を「新出三冊本『信長公記』」、略して「新出三冊本」と呼ぶこととする。

さて、『信長公記』は、書名の如く信長の事績を記した書物である。『我自刊我』（明治十四年刊）・『改訂史籍収覧』（明治三十四年刊）所収本の出現に至るまで、長く写本で伝えられた。これに対し、甫庵の『信長記』は元和八年古活字刊本以来、刊本で流布した。何をおいても、両者の相違点はそこに顕在化するもののようである。

作者太田牛一（大永七～慶長十五年）は、弓の衆として織田信長に仕え、織田家滅亡の後、豊臣家に仕えたとされる。[2] 大村由己の如き所謂「御伽衆」ではない。その著作は、ほぼ記録というに相応しい文章であって、甫庵に見る流麗さは一つもない。

『信長公記』の諸本は、石田善人氏の精緻なご研究によって一覧化がなされている。[3] 系統の大概は、十五巻本と十六巻本の二種に分類することができる。この他、一巻のみの自筆零本等が存在する。十五巻本と十六巻本の相違点は、一巻分多い十六巻本の方に「首巻」と呼ばれる巻が存在する点である。これを除けば、両者とも一年一巻宛の、ほぼ同一の内容となる。但し、十六巻本は十五巻本よりも文章に推敲の形跡が認められ、文意が明確なだけでなく、幾分にも流暢な文章に改変されている。

十五巻本を代表すべき伝本は、岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫本『信長記』（自筆本）である（以下、適宜「岡大池田家文庫本」と略称する）。また、内閣文庫本『原本信長公記』もまた、つとに知られた一本である。[4] このほか、公共的な性格を有する資料保存機関で閲覧を許されるものは、概ね十五巻本である。これに対し、十六巻本は、陽明文庫・東京大学総合図書館の二箇所二本のみ閲覧可能な状態にあり、善本の選別に余裕無くしてひたすら珍書の格に住する如くである。[5]

如上、諸本の大概を眺める時、学的な争点は自ずから「首巻」の有無が生じた理由と、「首巻」が後から加えられたのか・初めから存在したのか、に定まらざるを得ない。念のために申し添えるならば、先学の諸研究には、「首巻」

は最終段階において結合されたもの、もしくは全く別な書物を合わせた結果、との御見解が主流を占める。[6]

三、新出三冊本の本文①

「首巻」とは、信長の上洛以前を記した巻である。先に述べる如く、十六巻本にしか存在しない巻、の筈である。ところが、新出三冊本にも「首巻」相当本文が存在するのである。もちろん、上巻冒頭に据えられている。

はたして新出三冊本の本文は、どの系統に近似するのか。件の問題に決着をつけることにより、「首巻」の成立時期は自ずと明らかになろう。まずは、新出三冊本と十五巻本系・十六巻本系本文との比較を試みたい。比較の箇所は、十五・十六巻本の巻二―一。「六条合戦」の様を記した部分である。比較の方法は、新出三冊本を翻刻し、右脇に①十五巻本（岡大池田家文庫本）・②十六巻本（陽明文庫本）との異同を添え書きした。翻刻本文の中の「●」は、新出三冊本の欠落部分を示す。また、十五・十六巻本に存在せず新出三冊本に存在する部分に関しては、翻刻本文（新出三冊本）に傍線を付し、右脇に「〈欠〉」と注記した。[7]

①十五巻本との比較（岡大池田家文庫本）

永禄拾二〔己巳〕　正月四日、三好三人衆并、斎藤右兵衛大輔龍興、長井隼人等、南方之諸牢人ヲ相催、致上洛。公方様六条ニ御座候ヲ、●（薬師寺九郎左衛門武者大将ニテ）、取詰門前焼払既、先懸〈欠〉之大将薬師寺九郎右衛門、寺中へ可攻入之行〈欠〉也。尓処、六条〈欠〉ニ楯籠御人数、細川典厩　津田左近　野村越中　赤座七郎左衛門　赤座助六　●（津田左馬丞）　渡ノ勝左衛門　坂井与右衛門　明知十兵衛　森弥五八　●（岡村平六）　内藤備中●（守）、若狭衆山縣源内●（宇野弥七）一番〈欠〉ニ切而出、●（切崩）　討死候〈欠〉也。宇野弥七両人、無隠夕男七也（誤写・朱校「勇士」）。六条ニ楯籠〈欠〉リ、〈御敵〉●　宗徒之者数十人、討捕相防候御後巻トシテ、池田筑後

池田セイヒン　伊丹　荒木　茨木　細川兵ℿ大夫　三好左京大夫、懸向、カツラ川辺ニテ、取合、及一戦、鑓下ニテ●（御敵討死之衆）高安権頭　吉成勘介　同弟　岩成弥介　林源太郎　市田カナ目介、此等ヲ討捕被得大利、右之趣信長へ御註進。

②十六巻本との比較（陽明文庫本）

永禄拾二己巳　正月四日、三好三人衆并、斎藤右兵衛大輔龍興、長井隼人等、南方之諸牢人ヲ相催、●（先懸大将薬師寺九郎左衛門）致上洛。公方様六条ニ御座候ヲ●（取詰め門前）焼払既、先懸之大将薬師寺九郎右衛門、寺中へ可攻入之行也。尓処、六条ニ楯籠御人数、細川典厩　津田左近（織）　野村越中　赤座七郎左衛門　赤座助六、●（津田左馬丞）渡ℿ勝左衛門　坂井与右衛門　明知十兵衛　森弥五八　内藤備中、●（山県源内）●（宇野弥七）若狭衆山縣源内、一番ニ切而出、討死候也。宇野弥七両人、無隠夕〻男七〻也（誤写・朱校「勇士」）。六条ニ楯籠リ、宗徒之者数十人討捕相防候、御後巻トシテ、

御敵薬師寺九郎左衛門幢本へ切つてかゝり、切崩し、散々に相戦ひ、余多に手を負せ、鑓下に両人討死候なり。襲懸れば追立つて、火花をちらし相戦ひ、矢庭に三十騎ばかり射倒し、手負死人算を乱すに異ならず。乗入るべき事思ひ寄らず。懸処に、三好左京大夫・細川兵部大輔・池田筑後、各後巻にこれある由承り、薬師寺九郎左衛門小口を甘候。是は後巻かつら川表の事、

●、細川兵部大夫　池田筑後（三好左京大夫）　池田セイヒン（池田筑後）　伊丹　荒木　茨木　細川兵ℿ大夫　三好京大夫、懸向、カツラ川辺ニテ●（御敵に）取合、●（則）及一戦、●（推つおされつ黒煙立て候て相戦ひ）、鑓下ニテ●（討取る類の注文）高安権頭　吉成勘介　同弟　岩成弥介　林源太郎　市田鹿カナ目介、此等ヲ●（始めとして歴々）討捕被得大利、右之趣信長へ御註進。

右の如く、十六巻本には、十六巻本にしか存在しない、大幅な増補部分が存在している。これにより、新出三冊本の本文は、十六巻本より、むしろ十五巻本に近似することになる。しかし、十五巻本系とも異なっている。その相違は、語句の配列にまで及んでおり、誤写では絶対に生じえない、明らかな異本であることを示している。

新出三冊本と十五巻本の前後関係を探るべく比較を試みるならば、右引用の最終部分、即ち「高安権頭吉成」以下の行文が最も適切であろう。当該部分は、敵方の戦死者の姓名を列挙する下りであるが、新出三冊本は単純な人名の列挙に止まる。これに対し、十五巻本には「御敵討死之衆」と前置きの文句が据えられる。さらに、十六巻本では、その直前に、「推つおされつ黒煙立て候て相戦ひ」と情景描写が挿入され、人名列挙の前に「討取る頸の注文」の文言が記されるに至る。一条に人名の列挙が複数回繰り返されるため、敵・味方の別を注記することは、本文を整備する上での自然な推敲過程というべきであろう。つまり、その進行過程を、「(何もない状態)」(新出三冊本)→「御敵討死之衆」(十五巻本)→「(情景描写)+討取る頸の注文」(十六巻本)の順序に並べることが至当であると考えられるのである。

三、新出三冊本の本文②

では、新出三冊本に存在する「首巻」とは、いったい如何なる状態の本文なのか。現存十六巻本との前後関係を探るべく、本文の比較を試みたい。比較の箇所は、「首巻」の冒頭である。なお、本節では手順を変えて、まずは十六巻本から先に見ていきたい。

去程に尾張国八郡なり。上の郡四郡、織田伊勢守(中略)、半国下郡四郡、織田大和守下知に(以下省略)。

真っ先に注目しておきたいのは、文字囲みを施した部分である。これは、対句的な呼応表現を以て、尾張国の八郡を、上の四郡ともう半分の下四郡、と半分づつの領有形態にあった事情を述べたものである。一見しただけでは、何の変哲もない、ままありがちな調子のよい書き出しの如くに見えてしまう。しかし、ここに新出三冊本を差し挿むことにより、状況は一変する。以下は、前節と同様、新出三冊本の本文を翻刻し、右脇に十六巻本との異同を添え書きしたものである。

去程ニ、尾張国ハ八郡也。武衛様之御家老（欠）織田伊勢守（順序逆転）上ノ郡四郡、諸侍手ニ付進退シテ岩倉ト云所ニ居城也。半国下郡●（四郡）、織田大和守下知ニ随へ、●（上下川を隔て）清洲之城ニ武衛様置申、同（欠）大和守ヲ城中ニ候而守立申也。

右の如く、新出三冊本の本文は、十六巻本とは明らかに異なっている。誤写によって生じ得ないこともまた先に同じである。一々の異同を点検すると、以下の如くになる。まず、三冊本は、十六巻本に見る美しい対句の呼応が読みとれない程に雑然とした記述になっている。即ち、新出三冊本は、「上ノ四郡」の上に人名が記され、なおかつ「下郡」の方に「四郡」の二文字を欠いている。そのため、上下の「四郡～」「四郡～」の小気味よい呼応が出てこないのである。さらに、十六巻本には、清洲の地理的な位置を「上下川を隔て」と記されるのに対し、新出三冊本はこれを欠いている。これを記す十六巻本は、結果的にまるで地図を見るかのような鮮明さを保有するに至り、一方の新出三冊本は雑然の観を呈するばかりである。

右に見る異同は、とりもなおさず新出三冊本の本文が、十六巻本より遙かに早い段階の状態を保つ由を示す以外の何ものでもなかろう。しかし、両者には、本文異同に止まらない、さらに重要な相違点が存在するのである。それは、

新出三冊本に見る条・段落の欠落である。

その内、一等注目に値するケースとして、十六巻本の首巻―二七「蛇がへの事」を挙げることができる。件の一条は、挿話的な性格を有し、二話併記の構成をとる。即ち、前半「爰に希異の事あり」云々、後半「去程に身のひゑたる危き事あり」云々で語り始める二話の併記である。ところが、新出三冊本には、これの前半一話しか存在せず、後半一話が欠落しているのである。これと同様、首巻―四五（「首巻」の最終）もまた後半だけが欠落する。欠落した内容は、「鷹数寄」云々の話で、いかにも後補挿入の可能性を芬々とさせている。

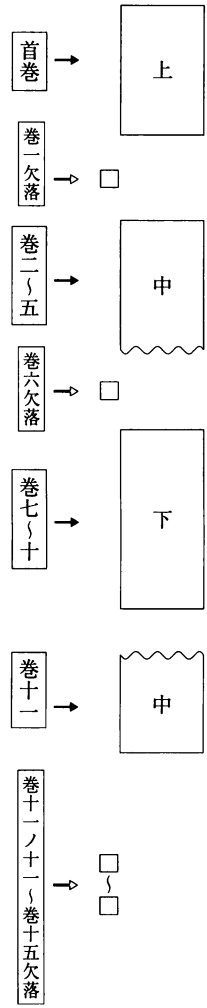
さらに、首巻―二一「天沢長老物かたりの事」もまた右と同様、挿話的な一条であるが、新出三冊本は一条まるごとの欠落をおこす。如上の挿話的部分は、合戦の記録とは異なり、二話併記等、後補が十分に可能である。それを欠くことは、そのままに、十六巻本より未成長な状態を示す徴証となり得るのではなかろうか。

このほか、首巻―一一「三ノ山赤塚合戦の事」、同二二「六人衆と云ふ事」の二条もまた完全に欠落する。件の二条は、挿話ではないので、理由を他に求める必要がある。私には極めて不得意な推定をなすならば、後者「六人衆と云ふ事」は、「太田又介」として、作者自身が登場するため、当初はこれを差し控えていたものか。一方の「三ノ山赤塚合戦」は、やや長い段で、人名の列挙や日付など、執筆に際して何らかの資料が必要となる部分である。これを欠落することは、執筆時に資料が未だ不足の状態にあったのか。(8)

ともあれ、以上に見る本文異同、条・段落の欠落により、新出三冊本の「首巻」相当部分は、現存十六巻本よりも、遙かに前の状態を保つと結論づけることが可能になった。

四、新出三冊本の構成

では、先に申し述べた「資料不足」云々の問題に立ち戻りたい。まず、先の書誌解題に記す如く、新出三冊本は、途中で年次に狂いを生じているのであった。この「狂い」を十六巻本との比較で、年代順（イコール「巻」の順序）に修正して図示すると、左記のようになる。



右の如く、新出三冊本は、第二冊（「中」）の途中で、年次に狂いが生じているのである。では何故に狂ったのか。この理由を解く鍵は、第二冊（「中」）の最終丁に存するもののようである。第二冊の最終は、十五巻本・十六巻本の巻十一―十に相当する。当該の一条は、「小相撲」の催しの記録に相当し、人名が多々記される。新出三冊本第二冊の最終は「小相撲五番打人数之事」で筆がピタリと止まっている。ちょうど、人名列挙の冒頭に相当する行文である。料紙には、あと六行のゆとりが存在する。そのため、落丁ではない。ゆえに、人名を記すことのできない理由は、推定するに一つしか存在しないことになろう。つまり、資料不足で書けなかった、と落ち着けるより他ないのではないか。(9)

すると、次ぎのような執筆過程が浮き彫りにされてくる。太田牛一は、①「首巻」相当部分から書きおこし→②「元亀三年」（巻五に相当・「身方が原合戦の事」を最終とする）までを書き→③資料不足のため、「天正二年」に飛ぶ→④「天正六年」まで書き進んだが「小相撲」の人名列挙で資料不足のため中断→⑤なおも中断理由となった「元亀四年」（巻六に相当）を書くことができないのでこれを飛ばし→⑥「天正二年」（巻七に相当）を書き→「天正五年」の条々までを書いた。

内容の如何を問わず、資料が手元にない場合は執筆を中断せざるを得ず、漸次状況の打開を待って、現在に見る十五巻本・十六巻本の状態に整えていったことになる。如上、新出三冊本の本文は現存十五巻本よりも雑然の体を呈するのであり、件の構成が前記の如くであれば、現在のところ、斯様に推定するしか学的には成立の余地を得ないのである。即ち、草稿段階の状態を伝える一本、と判断される所以である。

四、「首巻」の存在しない理由

岡大池田家文庫本（十五巻本）は自筆本である。当該原本をめぐる諸事情は既に石田善人氏の精緻なご研究により、すべてが解明されている。氏のご説に拠るならば、池田家文庫本は、池田輝政が自分の初陣の功を見たさ・読みたさに所望した一本である。しかも、牛一は献上に際して、池田侯に関連の記述を増幅して献上しているのであった。(10)

文学史の問題点はこの次の段階に存するのである。前節までに見る如く、「首巻」は十五巻本の成立以前に存在していた。ならば、どうして池田侯に「首巻」を献上しなかったのか。老筆の醜さを恥じたのか、単にもう面倒くさかったのか。理由の詮索は、『信長公記』の執筆過程と同様、資料がないので中断せざるを得まい。しかし、現象面の理解は、未だ学的推定の余地を残している。

現時点において、十六巻本は、陽明文庫と東京大学総合図書館にしか存在を確認し得ない。たった二箇所二本。しかも、陽明文庫本は、太田家→織田家→近衛家の順に流伝した本文である。[11] と、すれば、「首巻」は牛一の生存中には、ついぞ太田家の門を出ることがなかった、その可能性が大なのではないか。そうでなければ、当該領域における斯様な伝存状況は、どうにも説明がつかないのである。

すると、太田牛一は、意識・無意識の如何を問わず、ともかく「家」の中に伝えるべき「本文」と、流布させるべき「本文」との二種類を作ってしまったことになる。書誌学用語に換言すれば、例の如く、「証本」と「流布本」である。

池田輝政が抱いた希望はまさに〈当世〉への欲求に相違なかろう。では、それに応える側の牛一は、何をしたのか。自らの手で「家の証本」と「流布本」を作成してしまったわけである。通例、所謂「近世小説」には、それが存在しない。刊本を媒体とするため、もとより流布本しか存在しないのである。自らの手で「証本」と「流布本」を作る人物の内面には隠しようもない中世的な書物のあり方、即ち書物を「流布」させるのではなく「伝える」という意識が看取されよう。

本格的な仮名草子の登場する以前、極めて中世的な頑迷なる人物が、近世的な欲求に処した、時代の過渡期を象徴させるに相応しい、誠に具体的に過ぎる事例であろう。新出三冊本を差し挿んで見る自筆十五巻本『信長公記』の成立過程は、まさに以後連綿と繰り広げられる「〈現実〉への関心」「当世批判」の文芸が萌芽する、その前夜の雨音を聞く如くである。

〔注〕

(1) 野田寿雄氏著『近世初期小説論』(昭和五三年・笠間書院発行) 等を参照。

(2) 桑田忠親氏著『豊太閤伝記物語の研究』(昭和一五年・中文館書店発行) 等を参照。

(3) 複製本『信長記』(昭和五〇年・福武書店発行) に付される、石田善人氏の解題「信長記十五巻解題」。なお、諸本研究の嚆矢は田中久夫氏著「太田牛一著『信長公記』成立考」(『帝國学士院紀事』第五巻二・三号・昭和二二年一一月発行) であり、当該のご論考には自筆零本 (尊経閣文庫所蔵) の翻刻が収められる。他に、小島広次氏著「牛一本『信長記巻首』の性格について」(『清洲町史』所収・昭和四五年発行) 等の先行研究が存在する。

(4) 太田次男氏著「内閣文庫蔵原本信長記について」(『史學』第三六巻第二・三号・昭和三八年発行)。

(5) 角川文庫『信長公記』(奥野高広氏・岩沢愿彦氏校注・昭和四四年初版) 以外の活字翻刻本は、すべて町田本 (町田久成氏旧蔵本) を底本とする。但し、町田本は伝存不明。

(6) 小島広次氏は「牛一本『信長記巻首』の性格について」(補注3を参照) において、「首巻」を最初の段階から存在したことを主張。なおかつ、草稿段階における『信長公記』はすべて「一つ書き」であった由を推定された。新出三冊本は、氏の推定どおりの本文であり、これの登場により小島氏の主張が全て正しかったことが実証されたことになる。

(7) 岡大池田家文庫本は福武書店刊の複製本 (前掲3)、陽明文庫本は国文学研究資料館で閲覧サービスを行うマイクロフィルムに拠った。引用に際して、句読点は恣意的に補った。なお、引用部分は大妻女子大学草稿テキスト研究所におけるシンポジウムでも紹介したが、同日の発表資料には翻刻ミスを犯したため (シンポジウム記録も翻刻ミス) 訂正のため、再び当該部分の紹介を行った。

(8) 太田牛一は人名の列挙や日付の変わる箇所などに余白を設けることがある。これは、後日の補筆訂正の便宜であったとされる。岩沢愿彦氏 (角川文庫『信長公記』解説・前掲5)、石田善人氏 (「信長記十五巻解題」・前掲3) によって既にご指摘がなされている。なお、本稿本文に指摘した新出三冊本の欠落箇所のほかに、能の演目と能番組の欠落等が存在する (十六巻では巻三—三に相当)。

(9) 「巻」単位の欠落も存在する。これもた、資料不足のために執筆が遅れ、後に補入されたものと考えられる。なお新出三冊本に欠ける「巻」相当部位は、歴史史料との齟齬が激しいと指摘される部分とほぼ一致する。谷口克広氏著「太田牛一著『信長記』の信憑性について」(『日本歴史』第三八九号・昭和五五年一〇月発行)。

(10) 石田善人氏著（「信長記十五巻解題」・前掲3）。
(11) 田中久夫氏著「太田牛一著『信長公記』成立考」（前掲3）。

〔追記〕

本稿の内容は、大妻女子大学草稿テキスト研究所主催のシンポジウム（平成一三年一一月）の内容と大幅に重複します。同会において、ご教示・ご質問下されました江本裕先生をはじめ諸氏に感謝を申し上げます。なお岡崎久司先生より、新出三冊本は、その書誌的特徴から寛永期を遡るのではないか、とのご教示を賜わりました。記して御礼とさせて頂きます。